



Title	<展覧会紹介>京都高等工芸学校開校120周年記念特別展：「デザインの夜明け ― 京都高等工芸学校初期10年 ―」
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 50-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【展覧会紹介】

京都高等工芸学校開校 120 周年記念特別展

「デザインの夜明け ― 京都高等工芸学校初期 10 年 ―」

並木 誠士 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

2022 年は、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校（以下、京高工）の開校 120 周年の節目の年であり、京都工芸繊維大学美術工芸資料館では、この節目の年を記念し、展覧会「デザインの夜明け ― 京都高等工芸学校初期 10 年 ―」（以下、本展）を開催した。

明治 35 年（1902）に京高工は開校する。開校時には、色染科と図案科が、そして、一年遅れて機織科がスタートした。京都の伝統工芸の近代化を理論的、技術的にバックアップすることが目的で、地元の伝統産業の担い手たち、とくに染織業者が切望した結果だった。そして、図案科には海外の新デザインを京都の産業界に伝える役割が期待されたといっていよう。

初代の校長である中澤岩太（1858-1943）は、東京帝国大学で応用化学を学んだ化学者であるが、わが国の工芸の近代化に大きく貢献したドイツ人化学者ゴットフリート・ワグネル（1831-92）の元で研究を続けたため、美術工芸にも造詣が深かった。東京帝国大学教授であった中澤は明治 30 年に開設された京都帝国大学理工科大学の学長になり京都に赴任し、明治 33 年には、第三高等工業学校（のちの京高工）設立準備委員となり、開校準備の中心的存在として精力的に活動した。明治 33 年には渡欧して、パリ万国博覧会を見学するほか、ヨーロッパの実業学校の視察をおこなうが、このときにパリで、洋画家で東京美術学校西洋画科の教授であった浅井忠（1856-1907）と出会い、開設する京高工の教員になるよう説得した。

その後、京高工は順調に発展して、明治 45 年 7 月 3 日には、第 8 回目の卒業式に合わせて、開校

10 周年の記念式典を開催した。この記念式典に合わせて、7 月 4 日から 7 日まで、校内全体をつかって、収蔵しているポスターなどの標本類、参考品や生徒作品の展示をおこなっている。その晴れやかな様子は同窓会誌『済美』8 号に詳細に記されている。本展では、『済美』の記述によりながら、記念式典の折に展示をされた標本類などを展示したほか、初期の教員がヨーロッパから購入してきた参考品類、開校時に学校を軌道に乗せるために尽力をした中澤以下、2 代目校長となった鶴巻鶴一（1873-1942）、図案科初代教員の浅井忠、武田五一（1872-1938）、牧野克次（1864-1942）、都鳥英喜（1873-1943）らの作品類、生徒作品の数々を展示して、開校初期 10 年の京都高等工芸学校における図案 ― デザイン ― 教育を振り返った。



まず、展覧会の構成にしたがって、その概要を報告し、そのうえで、この展覧会の企画を通して得られた成果とその意義を明らかにしたい。

「第 1 章 教員たちの技と芸」では、初期の教員たちが教育・研究の一環として、あるいは余技として制作した作品を展示した。中澤、鶴巻はともに化学者であり、工芸にかかわる素材や染料の研究などが専門分野であったが、一方で、ともに絵画をたしなんだ。本展では、中澤が余技で描いた絵画、みずからが復活させた古代染色技法である蒔縷を駆使して鶴巻が制作した帯や屏風仕立ての作品を展示した。鶴巻の活動は、これまであまり注目されてこなかったが、染色技法と美術を結びつける重要な働きをしたことが明らかになった。浅井、牧野、都鳥は洋画家であり、それぞれが制

作した作品が残っているが、それに加えて、浅井が遊陶園、京漆園で図案指導した陶器や漆器類、さらに、浅井が没年の明治40年に祇園に開業した陶器店九雲堂の製品やその下絵を展示した。

「第2章 京都高等工芸学校創立10周年記念展「再現」——『済美』から」(図1)では、開校10周年記念展に出品された作品を『済美』の記述と美術工芸資料館所蔵作品とを比較して同定し、確認することができた作品を展示した。中澤は、京高工の教材であった国内外の美術工芸品類を、できるだけ学外にも公開して、新しい知識を提供しようと考えており、開校当初から学校内に一般公開も視野に入れた陳列施設の設定を計画していた。10周年記念展も中澤の強い指導のもとで実現したことが明らかとなった。

展示された作品のなかにはデッサンの教材になった鼓や鐙などの古美術品も含まれていたが、対象を正確に捉えたうえでその特徴を踏まえて簡略化するデザイン手法である「便化」の手本となったと思われるような郷土玩具もある。また、当時東京で開催された展覧会で評価を得たばかりの板谷波山(1872-1963)の作品も展示された。最先端の造形や技術を伝えようとしていたことがわかる。

「第3章 教員たちの目——欧米の多彩なデザイン資料」(図2)では、初期教員たちがヨーロッパ留学から帰国する際に教材として持ち帰った作品群を展示した。

中澤は、開校前に浅井・武田に教材を購入して帰ることを依頼しており、中澤自身も教材としてガラススライドを購入している。これは、1895年にフランツ・シュテットナー(1870-1946)によってベルリンに設立されたInstitut für wissenschaftliche Projection(学術用映写研究所)で制作・販売されたもので、古代から近代までのおもにヨーロッパを中心とする美術工芸品や建築装飾が写されているが、アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド(1863-1957)やオットー・エックマン(1865-1902)、リヒャルト・リーマーシュミット(1868-1957)、ブルーノ・パウル(1874-1968)など同時代に活躍

したデザイナーや建築家の作品が多数含まれていることは興味深い。最新のツールで最新の情報を提供しようとしていたことがわかる。また、本学附属図書館には、中澤旧蔵のチャールズ・ヒアット著『Picture Posters』(1895)が残されているが、浅井が収集したと思われるポスターと同じ図柄のポスターが数多く掲載されており、この本が参考にされた可能性が高い。当時ヨーロッパですでに人気を博していたシェレやスタンラン、ロートレックらによるポスターは、ほぼ同時代に収集された貴重な資料である。初期購入のポスターについては掛軸装で使用された。

ポスター同様、図案科では、開校初年度から大正4年(1915)にかけて多数の国内外の陶磁器やガラス器が標本として収集された。開校直後に納入されたフランスのエミル・ミュラー社による蠟燭立とインキ壺は、女性や植物をモチーフにしたアール・ヌーヴォー期らしい曲線的なデザインと、多様に変化する釉薬が特徴的である。同じく浅井が選定したと思われるブーランジェ社ショワジー・ル・ロワ製陶所による陶製花瓶と壺もアール・ヌーヴォーの特徴をよく示している。このうち《沢渦文蓋小壺》は、明治42年に発行された浅井忠編『訂正浅井自在画臨本』第5編の参考図版として、その写真が掲載されている。

武田はウィーン分離派の展覧会ポスターを納入した。武田は、着任前のヨーロッパ留学時ウィーンに立ち寄り、第17回展を見学しており、その際収集したと考えられる。

1853年、ハンガリーに設立されたジョルナイ工房によるエオシン釉による花瓶や、現在では宝飾品で有名なティファニー商会によるガラス製花瓶も、当時の最先端の技術とデザインによる製品で、初期の重要な収蔵資料である。

また、正確には開校時に教材として購入されたものではないが、都鳥英喜旧蔵品として平成29年(2017)に関係者から当館に寄贈されたポスターも初公開作品として展示した。このうちの一部は大正10年(1921)8月に発行された『最近仏蘭西

ポスター集 三 K 会図集 都鳥英喜氏蒐集』(積善館)に掲載されている。同書によれば、大正 8 年から約 2 年間のフランス在留中に都鳥が現地で収集したものであり、都鳥による指導に活用された可能性が高い。

「第 4 章 京都高等工芸学校と関西美術会」では、京高工の初期の教員たちが学校の外でも親しく交流をしていたことがわかる関西美術会に関する新出資料を集めた。

明治 34 年に京都の田村宗立、伊藤快彦や大阪の牧野克次ら洋画家が結成したのが関西美術会である。そして、彼等が会頭にいただいたのが、当時、京都帝国大学理工科大学長であった中澤であった。結成の翌年には京高工が開校し、浅井が赴任して同会に参加した。中澤という求心力のある会頭と浅井という恰好の指導者を得て、関西の洋画壇は一気に活性化することになる。

明治 36 年 11 月に開催された関西美術会第 2 回展には、発起人である牧野に加えて浅井と都鳥、さらに中澤と鶴巻も出品している。なお、この年の 11 月 15 日に開催された関西美術会総会では、幹事として鶴巻が、委員には牧野、都鳥が選ばれている。牧野・都鳥は洋画家であるので当然としても、鶴巻が幹事に選出されている点が興味深い。また、明治 37 年 10 月の第 3 回展には、中澤・鶴巻・浅井・武田・牧野にのちに講師になる鹿子木孟郎(1874-1941)や、図案科 1 期生である間部時雄(1885-1968)、霜鳥正三郎(1884-1982)が出品している。

なお、関西美術会の第 2 回展には、参考作品として京高工が所蔵する「外国広告画」(ポスター)が展示された。本展では、このときに展示公開された可能性が高いポスターを展示した。この参考作品については宮島久雄『関西モダンデザイン前史』(中央公論美術出版)で日出新聞の記事と現存作品を対応させているが、その時点で所在不明であった浅井持ち帰りの 2 点のイタリアポスターが平成 28 年(2016)に附属図書館で「再発見」されたため、今回は、この 2 点のポスターも展示し

た。いずれも幅 2m 近い大型で、修復にあたり、「再発見」時と同様の掛軸形式をとどめた(図 3)。

さらに、本展では、田村、伊藤、鹿子木や太田喜二郎、長谷川良雄ら関西美術会の面々が中澤会頭に贈った画帖や色紙もはじめて公開することができた。

「第 5 章 初期講師作品と生徒たちのあゆみ」では、上記以外の初期教員と初期の学生による作品を、学年毎の課題をできるだけ追体験できるように展示した。それにより、便化によるパターン作成、本の装丁やデール掛の装飾といった平面的なものから、燭台・火鉢・飾り棚など立体的なものへと展開する様子を辿ることができた。また、学校でデッサンのモチーフとして使用された石膏像も多く保管されており、なかには、1794 年にフランスで創業したルーブル複製工房により製作され、輸入された可能性の高い《ミロのヴィーナス像》《円盤投立像》がある。本展では、1 期生でのちに教員になる霜鳥が「図画実習」で描いた石膏デッサンとともに公開した。



この展覧会を企画することにより得ることのできた成果のひとつは、京高工が近代京都の美術工芸界、デザイン界に大きな役割を果たした点、なかでも、これまであまり注目されていなかったが、校長の中澤岩太の求心力のある活動が大きな意味をもっていたことが明らかになった点である。中澤は、東京在住時代から化学者として博覧会等で工芸関係の審査をおこなっていたため、京都でもはじめはその知見が重要視されたと思われるが、やがて、関西美術会での活動や関西美術院の設立など美術界にも中澤を中心とするネットワークが確立し、それが京都の伝統工芸の近代化を推し進めていったといってもよいだろう。

そして、その中澤の方針により、京高工では、ヨーロッパを中心とする標本類を積極的に収集し、それと同時に、それを学内外に広く公開した点が指摘できる。ポスターや陶磁器に代表される新しい欧米の作品類は、現場で作業をする人たちに

とっても、また、それを指導する立場の人たちにとっても、有益なものであっただろう。これもまた、京都の産業界の近代化に寄与するところが大きかったと考えられる。



本展では、京高工関係者のご遺族から相次いで寄贈していただいた作品や資料が重要な位置を占めている。ここであらためて謝意を表したい。

なお、本展覧会は、美術工芸資料館の並木和田積希、京都女子大学青木美保子教授、京都美術工芸大学の岡達也准教授が企画した。いずれも意匠学会会員である。また、本展覧会に合わせてカタログ兼研究報告『学理と応用 — 京都高等工芸学校初10年の軌跡 —』（図4、1000円）を刊行した。残部があるので関心のある方は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館（shiryokan@jim.kit.ac.jp）にお問い合わせください。



図1



図2



図3



図4